

書評

F・A・ハイエク『ジョン・ステュアート・ミルとハリエット・テイラー。その友愛と結婚』

F. A. Hayek: John Stuart Mill and Harriet Taylor. Their Friendship and Subsequent Marriage. London, Routledge and Kegan Paul Ltd., 1951. Demy 8vo., 320p.

木村 正 身

およそ学史・思想史の学徒が特定の思想家の理論・思想体系をその伝記に関連させて問題とするばあい、その問題意識は、たんに好奇をこととする詮索や体系の壮大さにたいする鑑賞におわるものであつてはならず、その思想家の理論・思想体系を、かれが古典としていみがあればあるほど、その生きた時代ないし社会構造の反映として把握し、理論・思想の論理を社会構造の論理に即して理解するとともに、そのような歴史的な社会構造が必然的に現代のそれにつらなっているいみにおいて、そのような理論・思想の論理を現代の問題とむすびつけて理解すること、にその基礎をおかねばならないことは、いうまでもなかる

F・A・ハイエク『ジョン・ステュアート・ミルとハリエット・テイラー。その友愛と結婚』

八三

う。だが、このことは、ひとつのあやまった研究態度をみちびきやすい。本来はまず理論・思想体系を忠実に吟味しつくしてから、それと時代構造との関連の規定をおわるべきであるのに、時代の階級構造の分析がともすれば上部構造にかんしてもいきなり割切った答をだして満足してしまひやすく——もとより基本線の把握はもつとも重要であるが——、そのため味な資料調査が興味をうしなつて、なおざりになりやすいということがいえるであらう。いきおい、のこされた資料探索の仕事もディレクタントにまかされやすい。十九世紀イギリス社会思想のようにそのアウトラインがなんびともわかつているものについては、ことにそうである。そういう点で理論史の面ではケインズの問題提起くらいイギリスの学界が、一方では古典派以前をさぐるとともに、他方では古典派そのものの文献の精査にむかっていることは、時代の要求がリカード対マルサスの問題をむしかえさせているからだとはいへ、着実な動向をしめすものというべく、スラッファが二十年の歳月をかけた「リカード全集」十一巻（二九五—）とW・スタークがロイヤル・イコノミク・ソサエティの委嘱で十年をついやした「ジュエリミ・ペンタム経済学著作集」三巻（一九五二—）とは、いま公刊進行中の重要な収穫である。しかしこのふたつのイギリス古典の整理が主として理論史研究上の重要事件であるのにたいして、思想史の上でも、J・S・ミルの文献整理の計画が、マックミンの「ミル・ビブリオグラフィ」の出版（一九四五年）を

機に、ハイエクによってくだされていっているのであって、本書はその成果のひとつであるといふことができる。

実際、今日のすすんだ経済理論の水準からすれば、ミルについてはわれわれは理論的にはすでにおおくまなぶにたるものをもたないとすらいろいろ(もつともかれの国際価値論はいまだ問題をのこしている)。それはただにマルクス理論の立場からばかりでなく、「モダン・セオリスト」たち(ハイエクをもふくめて)からもそうきめつけられるほど、ミルは過去の人となつた。しかしこれは時代のはげしい発展と理論の進歩によることであつて、社会思想史におけるミルの地位の重要さをなんびとも否定することはできない。われわれはミルの理論の重要度とその社会思想の同時代への影響の重要度を、区別しておかねばならない。ところでそのばあい、ペンタマイトⅡミルが、社会構造

の変動にめぐめてペンタムや父の支配から脱しようとする苦悩し、理想主義的社会改良主義者に転化してゆく過程は、かれの著作と時代のうごきとの直接の関連においてそのあらずじを容易にとらえることができるけれども、しかしミルとその時代との媒介物についての探究は、ともすれば忘れられてきた。ハイエクのミル文を整理の意図がこのような欠環をおぎなうことにとどまるのかどうかはわからない。周知のようにかれば古典的自由主義の擁護者をもってみずから任じ、「隸属への途」としての社会主義を攻撃しているのだから、ブルジョア学者はブルジョア思想をのみ問題としうるといふ真理はここでも完全にあてはま

るかもしれない。評者がいまあえてハイエクのミル研究をとりあげたのは、ハイエクの考えかたやミルの社会改良にいまさら価値判断をくだす必要を感じたからでも、ミルの女性関係に變な好奇心をよせたからでもなく、イギリスの社会改良理念の出発点になつたミルⅡカーライルⅡラスキンの地位関係をしめす資料を、社会政策思想史の立場から吟味したいがためにはかならなかつた。

本書は簡単にいうと、いまだ未発表のままて英米の諸大学図書館その他に蔵されている初期ミル関係文書を資料として、ミルⅡテイラー夫人の往復書簡およびそれに関係のある諸書簡を、ふたりの思想的交渉という観点にたつてだいたい年代順に編集し、これを詳細な解説文をもってぬいあわせたもの、ということができる。だからたんなるふたりの往復書簡の機械的集録ではなく、全体がひとつのナラティブとなつており、そういういみでハイエクの著作と称するにたり、読者は本書の表題に注意しなければならぬ。

二

本書の刊行は思想史研究上、ふたつの意義をもつていられるとおもわれる。第一にはミル研究上の謎であつたJ・S・ミルⅡハリエット・テイラーの關係が本書の秩序立つた展示によってほとんど完全にあかるみにだされ、すくなくともハリエットの生存期間にかんするかぎり解決をみたといえること。第二には本書によってミル自身の思想の転回の模様があきらかとなること

ともに、一八三〇年から五八年にいたるイギリス社会思想のうごきをするための重要資料がつけくわえられたこと。なお文献史的にいえば、ミル全集刊行のための重要資料が、これでほとんど出揃ったことになる。第二の点については本文の紹介をもってあてるとして、第一の点、および文献史的意義について、一言したい。

さきにもいったようにわれわれの関心がミルの理論のヴァイタリティ如何にあるのではなく、むしろかれの社会思想体系およびその形成転回過程の時代史的いみにあるとして、それについての解答の共通な線もまたすでにあたえられていることは周知のとおりであり、ただのこされた問題はミルとテイラー夫人との関係であった。これもいままさらいうまでもないことだが、ミルがかれの労作のうち抽象的・純粹に科学的な部分は自分のものであるにたいし、社会思想のいきいきした部分、道徳的な部分のほとんどすべてをテイラー夫人に負うているという主張は、ミルが公刊の機会あるごとに一見異常なほどの感激的調子をもって説いてうまなかつたところであった（「自伝」第六・七章、「自由論」の献辞、「原理」への献辞「ただしこれは少数のコピイのみにつけられた」、「論集」第二巻に再録された「婦人参政権論」の序、など）。「自伝」によっても、『生涯のもとも貴いまじわり』は、一八三〇年の半ばにはじまってから、ハリエット・テイラー（旧姓ハーデー）の夫君ジョン・テイラーの癌病による死去（一八四九年）についてハリエットとミルと

の結婚（五一年）を経てついにかの女が結核にたおれる（五八年）まで、かわることなくつづいたことになっているだけでなく、夫人死後のかれの使命は、じつに『わたくしの余生のあらんかぎりをつくしてかの女のありし日をしるのび、その面影と相語って得來るところの敗残の力をもって、かの女の遺志を継ぎゆくこと』（「自伝」第七章、西本訳二八二頁）にほかならなかつた。

いったいこれほどまでのハリエット傾倒が「あはたもえくぼ」の恋愛妄想に発しているのではないかという一見うがった解釈は、カーライルにはじまってたちまち風靡するにいたつたのだが、この解釈は第一に、ミルの性格形成のサイコ・アナリシスという課題を投じた点で興味があるとしても、ミルの冷静でバランスのとれた性格との関連を不解決にのこすものであり、そののみか、サイコ・アナリシスは、特定のサイコロジの内部の因果系列を分析できてもこのサイコロジ自身をうみだす時代の社会構造にまでふれることはできないのがふつうである。第二に、これは解釈者カーライルとその妻ジュエイン・ウェルシュとの関係の周知の皮相さを問わずがたりにしめす結果ともなっている。だからカーライルはジュエインの遺した日記で手ひどい天罰をうけた。むしろ、ミルとハリエットだけでなく、カーライルとジュエイン、ラスキンとユーフィーミア・グレイないしロウズ・ラ・トゥーシュといった女性関係をつらぬくヴィクトリアの上流知識人群像が、社会史の対象の一環としてとりあ

げられねばならないのである。そこにみられる進歩への期待は、かの奔放の女性メアリ・ウォルストンクラフト対イムレイ
 ||ゴドウィンの関係にみられるような、十八世紀末の産業革命
 の狂瀾やフランス革命の刺戟におうずるあらあらしくうつつと
 しい期待とことなっているはずであろう。

そこでのこされた肝腎の問題は、ハリエット・テイラーその
 ひとが実際にどのような思想の持主か、またミルへの影響のあ
 たえかたはどのようなものであるかを、直接の資料にもとづき規定
 することである。ところでハイエクも指摘するところ、一方
 では「自伝」はその思想的価値がたかいだけ、そのあまりに
 も理詰めの説明はかえって著者の人間そのものを知るさまたげ
 となることがかんがえられ、「自伝」の存在は適切なミル伝の必
 要を減ぜずにかえって増すものであり、他方ではミルは晩年に
 ハリエット伝をかくことをサイコロジカル・ヒストリをかくに
 ひとしいといつて断念した(ミル書簡、ポーリナ・W・デイウ
 イス宛、一八七〇年)から、なおまたヒュー・エリオット編の
 「ミル書簡集」も一八四八年以降のものを一般的にあつめるに
 とどまっているから、のこされた唯一の資料は、かれらの往復
 書簡およびこれに関係した文書にもとめられなければならな
 った。だがこのミル||テイラー文書は、つぎのような事情で諸
 処に散逸し、これまで研究者といえども容易に利用しがたか
 いたのである(本書序文参照)。

三

ミルの所蔵していた原文書は、かれの死後ハリエットの娘へ
 レン・テイラーによつて『ねたましく』(とハイエクがいう理由
 については後述参照)秘蔵され、ヘレンが死ぬ二年前の一九〇
 五年にアヴィニヨンの別荘(そこでミルは余生十五年間をすご
 した)をひきはらうとき、おそらく一部は滅失ないし散逸した
 が、大部分は安全にイギリスにおくられたらしく、ヘレンが死
 ぬと(一九〇七年)、その姪メアリ(ヘレンの兄アルジャンの
 末娘)にひきつがれた。その後まもなくH・S・R・エリオッ
 トはミルが一八四八年以降保存していた書簡の草稿を中心に、
 上述の「ミル書簡集」二冊をだした(一九一〇年)。このときエ
 リオットはメアリ所蔵のミルの私書簡を参照することをゆるさ
 されたが、これを公表することは一切禁じられた。メアリがみず
 からこれを公刊する意志があつたからである。

ところがこれは実現せず、タイプ原稿としたものを書物とす
 べく代理人と交渉しているうち、かの女は死んだ(一九一八年
 一月)。このタイプ原稿がいまなお存在しているかどうかは
 わからないが、これを保管していたはずの代理人・出版社・遺
 言執行人・弁護士等の事務所は一九四〇年十二月のロンドン「電
 撃」作戦で焼きはらわれてしまったから、残存の可能性はほと
 んどない。さて、メアリの死後、保管されていたものマヌス
 クリプは遺言執行人の指図で一九二二年三月、二七年七月の
 二回にわたり、ロンドンで競売に附され、そのほとんどがまず

諸書庫の入手するところとなつたが、その後少数が私人の手に渡つたほかは、だいたい英米の諸大学の図書館に収まつた。そのおもなものは、イギリスではロンドン・スクール・オブ・エコノミクス図書館（ただし、ブリティッシュ・ライブラリ・オブ・ポリティカル・アンド・エコノミック・サイエンス、アメリカではリーツ、ジョンズ・ホプキンス、イェール、ノースウエスタン）の各大学の図書館であるが、ロンドンのが量的に重要なものもちろんとして、イェールのももミルの妻宛の書簡のほとんどすべてと、W・J・フォックス宛の重要書簡がふくまれている注目されるといわれる。（もちろん初期のミルの書簡には別の入手経路がかんがえられ、たとえばブライダル・フォックス〔フォックスの娘〕が整理中戦災で焼けたフォックス文書のうち、ミルのフォックス宛の書簡群がのこり、これはケインズによつて発見されてケムブリジ、キングズ・カレッジ図書館におさめられた）。

こういうわけだから、ミル資料上の盲点となつていたミルII テイラア文書の整理と発刊も、ハイエックのような国際的名声とオウルド・リベラリズムへの熱情とをそなえた学者にしてはじめてできることであつたらう。

本書は、資料提供者への謝辞、凡例、二十三頁にわたるハイエックの序文、十二章約二百五十頁からなる本文、三つの附録、附註、索引という構成である。本文各章の表題はつぎのとおり。

—(一)ハリエット・テイラアとそのサークル(一八三〇)。(二)邂逅

F・A・ハイエック『ジョン・ステュアート・ミルとハリエット・テイラア。その友愛と結婚』

八七

と初期の危機(一八三〇—三三)。(三)結婚・離婚にかんする意見(一八三三—三頃)。(四)友人たちとゴシップ(一八三四—四二)。(五)友愛の年月(一八三四—四七)。(六)共同製作(一八四七—四九)。(七)ジョン・テイラアの病氣と死(一八四九)。(八)結婚、ミルの家族との破綻(一八五一)。(九)病氣(一八五一—五四)。(十)イタリアとシチリア(一八五四—五五)。(十一)ギリシア(一八五五)。(十二)ミル夫人の晩年と死(一八五六—五八)——附録は(一)ハリエット・テイラアにつくつた三つの詩。(二)ハリエットの初期の未発表の一篇論文。(三)ミル、ハーデー、テイラア三家族の系譜略表。からなつてゐる。なお本文には五つの写真が織りこまれてゐる(一)ミルのハリエット宛書簡、一八三四年頃のもの、イェール大学図書館所蔵原本の複写。(二)一八三四年頃のハリエットの油絵像、ハイエック所蔵。(三)一八三四年頃のハリエットのミニアチア、二枚、ロンドン・スクール図書館所蔵。(四)ジョン・テイラアのミニアチア、同所蔵。(五)一八四〇年のミルのメダリオン、エリオット編「書簡集」からの再録。)。本文では編集される書簡は十二ボ、ハイエックの解説は十一ボと区別されており、原文のパンクテュエイションはリーダブルなかぎり尊重されているといふが、この点ミルたちの癖もあり、苦心のあとがみえる。

本書のように資料的価値によつて生命をもつとおもわれるものは、抽象的な紹介のしかたでは中途半端なことになるであらう。それで評者はやや詳細に章を追つて内容を紹介してみたいとおもふ。思想史のうえからは、第一章と第六章がとくに興味

ある部分とおもわれる。

四

第一章は一八三〇年にふたりが邂逅するまでのそれぞれの生いたちと家庭事情のハイエク自身の筆による簡潔な解説が中心で、前半はハリエット、後半はミルにあてられ、本書全体のしめくりとなっている。読者はここですでに、まずハリエットについては、実家（ハーディ家）におけるおそらく精神的に不遇な生いたちと繊細ですどくひらめく知性、またそこから社会因習とくにヴィクトリア的固陋な婦人観にたいするはげしい急進的合理主義の芽ばえについての予備智識をあたえられる。かの女の知性と急進思想との橋わたしとなったのは作詩を契機とする「マンズリ・リポジトリ」サークルとの交渉であった。

このサークルはユニタリアン派の急進的牧師W・J・フォックス（のちに政界にはいった）に指導され、フラワ姉妹（エリザ、サラ）によっているとされ、ユニタリアン派の機関誌「マンズリ・リポジトリ」を一八三一年いらいフォックスが編集するにおよび、宗教的色彩をのぞいて進歩的文学政治雑誌に転ぜしめつつあった。ハリエットの第一の夫ジョン・テイラーが科学や芸術のセンスを欠いていたとはいえ瘦型の好男子で正義感のつよい円満・活潑な青年実業家であっただけでなく、フォックスのユニタリアン衆会の財政の面倒をみたり（ハーディ家もテイラー家もこのユニタリアン衆会に属していた）、新設のロンドン大学に関係したり、また「リフォーム・クラブ」創設時のメ

ンバーであり、仏伊からのおおくの亡命者の面倒をみている点が、注意される。ミルについてはハイエクは、「自伝」が『精神の危機』から三十才までのかれのイメジをあきらかにしていない点を注意し、そのころのミルの風采や心理状態をサイコ・アナリティカルに考証している。のこっているミルの一番若い肖像は三十四才のときのもの（メダリオン）で、すでに顔もなけば禿げがあり、一八三五年末いらいの結核の進行・眼瞼のひきつりの開始と照応しているが、二十五才のミルはいまだスマートで情熱的な青年であったという点（カライルの証言）は面白い。ミルの心理状態については、周知の父によるおどろくべき隔絶早期教育に堪えたかれの記憶・理解・発表力はすぐれていたとはいえ、独創のしるしはほとんどみえず、十八、九才で学問・政治（ベンタミズム）に通暁しながらいわゆる社会をまったく知らず、とくに婦人を見るのは幼児にひとしかった（友人ロウバックの証言）。この事態の自覚と父の強力な支配からの脱出の努力、くわえて家庭の愛情の欠如と家事雑用の繁忙は勉強の過労とともに、かれのメランコリアと転機の原因となった。ここで注目されるのはミルの母にたいする観察である。周知のとおり公刊の「自伝」では、母にかんしミルはいっさい口をつぐんでいるが、「自伝」の初期草稿にはつぎのような注目すべき母への批評があるといわれる——この草稿は故J・H・ホランダの所蔵していたもので、いまもなお保存されているらしいが、その遺言執行人はハイエクに閲覧を許可しなかったそ

うである。それでハイエクは一九四五年にまだ利用できたときのA・W・リーヴァイの論文『ジョン・ステュアート・ミルの精神の危機』(「サイコロジカル・リヴュー」所載)から再引用したのである。——『しかしいまわたくしがここのべていること——わたくし自身に作用した道徳的な力——にかんしていえば、きわめて恥ずべきことだが、父のおおきな子供たちは父を愛してもいなければ、他のだれをもあたたかい愛情で愛するということがなかったというのを、指摘しなければならぬ。ほんとうにあたたかい心をもった母親というものは、イギリスではまれな存在なのだが、そういう母であつたら、まずもってわたくしの父も全然ちがつた人物となつていただろうし、つぎに子供たちもひとを愛しひとから愛される人間に成長したてであろう。けれどもわたくしの母はせいぜいよくみて、家族のためあくせくと生活をおくるすべしか知らなかった。家族のために行うことはなんでもしたし、家族もその親切のゆえにかの女を可とはしたが、しかし愛されたり尊敬されたり、いな服従されるということすら、かの女の不幸にしてもあわさぬ資性を必要としたのである。こうしてわたくしは愛が欠け恐怖が存するもて成長したのであり、わたくしの道徳的成長をさまたげた点でかかる養育の効果は多大でぬぐいがたいものである。わたくしは人への近接衝動をもつたまま成長した。感じたことをみな言えるようなひともなく、わたくしが尊敬したところのまじわりうる唯一のひと、こわくて、どんな行爲もまた率直、

自発的にやりたいとおもう気持をも、うちあけられなかった。精力的な父親の息子というもののおおくがこうむるいまひとつの不幸にわたくしもあずかった。子供時代をつうじて、つよい意志の不断の支配下にあつたということは、本人の意志をつよくするのには不利である。あまりにもよく、なにをせよ、と直接命令の形でか、それともしないのはいけないという叱責の形でいわれる結果、わたくしの道徳的行爲者としての責任を父にまかせてしまう習慣がつき、わたくしの良心も父の声によるほか、けつしてわたくしにはなしかけることがなくなつた。』

ところでリーヴァイのサイコ・アナリシスは、ここからミルの「危機」の原因を父が死んでほしいという抑圧された感情、その結果としての潜在的犯罪感と自由への絶望、に帰しているが、他方ハイエクはこのミルの觀察が結婚後の母との不和の時期にかかれたものらしいこと、また当時ミルの家庭を訪ねたひとたちがあかるい団欒とミルの孝養ぶりを目撃していること(H・ソリイとJ・クロムプトンの証言)をあげ、疑問はこのころとして結論を控えている。この章ではミルのスターリング宛の手紙(一八二九・四・一五附)だけが、ハリエットと邂逅するまでのかれのみたされぬ心理状態をしめす例として採録されている。

五

第二章では「マンズリー・リポトリ」をめぐるふたりの交友のはじまりがくわしく考証され、それにかんする齋簡があつめ

られている。書簡の最初のグループは、同誌の寄稿家のひとり
でロンドン在住のフランス人ドサントヴィユをめぐるので、
これによって読者は一八三一年初すでにジョン・テイラーとミ
ルとの間に或る衝突と和解があったらしいこと、テイラーがド
サントヴィユやサン・シモン主義者ボンタンを介してフランス
の亡命共和党員の世話に熱をいれていたことがわかる。「マン
リ・リポジトリ」におけるハリエットおよびミルのおもに詩に

かんする活動についてのハイエクの解説はくわしいが、ここで
は、ハリエットの活動が一八三二年に集中され、三つの詩、六
つの書評、一つの小説をものしていること（詩と小説は本書附
録に所収）、その評論の論旨にはとくにかわつた点はみられない
がつよい急進的調子があること、またミルは三二年九月に「天
才論」を処女投稿し、翌年一月から常連となつてうまれてはじめ
て詩への興味をしめし、カーライルやロウバックによって詩的
素質の欠如を指摘されたかれも、まず「素質の詩的でない詩人」
ワーズワースの発見にはじまつてハリエットとともにシェリヤ
新進テニスを賞め、バイロンをけなし、少年ブラウニングの
詩を批評したりしていること、かくてこのときふたりの意見は
すでに完全に一致していたこと、を指摘するにとどめよう。こ
の章ののこりはふたりの初期の愛の書簡の収録にあてられてい
るが、とくにハリエットのミル宛の一書簡（一八三三・九・六
附）がミルの恋愛にたいする消極的態度をはげまし、「遠慮がた
ねにあるのは愛ではありません」、「最大にしてすべてか、しか

らずんば無か、中間はありません』などといっているのは、か
の女およびこの恋愛の性格を物語るものとして、注意をひく。
この結果テイラー夫妻の半年間の試験的別居とその間のハリエ
ットおよびミルのパリゆきを経て、夫人とミルとの友情は継続
させ夫妻の婚姻形式は維持するという妥協が成立するが、結局
ハリエットはふたりの男性のいずれにたいしても「心セルヴァンティンの友」
たるにすぎなかつた。

第三章ではふたりの関係から当然に重要な論議対象となつた
はずの婦人・結婚問題につき初期の書簡が残存しないところか
ら、ハイエクは一八三二年頃にふたりが独立にかいて交換しあ
つたらしい草稿を、ひとつずつしめしている、ミルのは、なが
くて本書で十八頁にもわたり、すでにのちの「婦人の隷従」の
輪廓をしめしている。ハイエクは、この男女平等思想ばかりは
一般の想像とは反対にハリエットからの借りものでなくミルの
独創であり、かえつてこれがかの女との交友の機縁となつたの
だという「自伝」でのミルの告白のただししいことに注意をうな
がしている（同旨、この草稿、冒頭）。ハリエットのもは数篇の
草稿断片中も、とも完全なものといわれ、ミルの婦人観に尊敬
と期待をむけている。

第四章はミルの友人たち、とくにロウバックやカーライル夫
妻のミルの恋愛についての觀察の書簡を中心に展開され、カー
ライル「フランス革命論」第一巻原稿焼却事件を経てミルとカー
ライルとの友情が次第に冷却し一八四六年の絶交にいたる過程

が書簡の年代をふみこえひといきいきととりあつかわれ

ている。ミルの恋愛がすすむにつれてのカーライルの世俗的憐憫の表示は、サラ・オースティンをはじめとする一群のゴンツプ・メイカーたちの介在にささえられていたこと、ミルがこれらのひとびとを極度に嫌悪するにいたったことに注意すべきでこの群のなかにハリエット・マーティノウも加わっていた(かの女はフォックス・サークルをつうじてミルたちを知ったが、終始その俗っぽさのゆえにミルたちに嫌悪されている)。なおジュインがハリエットを危険人物とみなし、つきあってもためになることはないといひ、夫の意見に同調しているのが注目される。

第五章はまず三人の間の妥協にもかかわらず一八三四年から四七年にかけてつづいた微妙な葛藤をめぐる書簡群と、この間における「ロンドン・ウェストミンスター・リヴュー」編集に ついてのハリエットの関係やインディア・ハウスの劇務にとともなう健康不調やその結果としての秘密のイタリヤ旅行における観察などのことをかいた書簡ないしその抄録をかかげ、つぎに一八四〇—四七年のブランク期の原因を解説し、カーライル講義(三八—四〇年)にかんするハリエットの一書信をしめしてのち、著者はあらためてハリエットのこの頃の文筆活動・生活・宗教政治観を解説し、さいごにかの女のミル宛の書簡二つをかかげているが、そのひとつ(一八四四年頃のものはコントとミルの往復書簡中での婦人観の対立においてミルが譲歩した点をあげしく非難したもので、注目される。

六

第六章は本書の核心的部分である。まず四七—四九年の「共同製作」の時期における「原理」の献辞問題をティラー夫妻間の書簡を中心にとりあつかひ(夫はつよく反対したが結局若干コピーだけに献辞が附されることになった。献辞の文句もあわせてしめされている)。さらにハリエットのフォックス宛の婦人の自由を論じた書簡(一八四八・五一〇附)、婦人の自由と労働問題との関係を説き前者の優位を主張した書簡(五・一二附)、がしめされる。後者においてかの女は、婦人問題同様労働問題にもふかい関心をもっているといひ、労働問題とは『社会構成全員間にその生涯に遂行する労働の量を平等化すること』(p. 123)であるが、しかしこれは経済学の過誤にもかかわらずフランス識者の熟考中の問題であるから、『下層階級の要求によって上層階級のヒドラの頭的な利己心が粉碎されるまでは重要問題たりつづけること、うたがいありません。ところが婦人の地位問題はこれよりもっと人類の精神的・道徳的徳性に喰いついており、わたくしの関心をもっているのは人類なのです。』(p. 124)という。ハイエクはさらに一八四八年当時のアイランドや大陸の革命的動向にかんしんして兩人のしめした見解の資料としてハリエットの二つの書簡をしめしている。第一の書簡(一八四八・七・二五附)では「デイリ・ニューズ」へのミルの寄稿文を評していう、『あなたはどうして一擧が成功しえないということを知ることができなのでしょう。—あ

たしの意見では、たとえ成功しなかつたとしても、真面目なものであれば、人民の精神をふるいたたせ火を点ずることによって利益があるかもしれないでしょう。人命をうしなつたことでアイルランド人はこわがりはしないで鞭撻されるだらうとおもいます。ただしこれはまったくわれわれ同志のはなしで、あのだらしなない連中にいうべきことではありません。ハリエットは、進歩主義者だ。たはずのフォックスまでが七月二十二日の議會で「人身保護律停止法案(アイルランド)」の実現に全力をつくすと演説したのをなげいて、『フォックスのリベラリズムは商売』、『これがジョン・ブル主義の地位争いというものでしょうか』といい、その点ミルこそイギリスでいやしくも心情のそなわつたただひとりの男性です、といっている。さらにかの女はホリヨック編集の週刊紙「リーズナ」(当時「原理」)の値がたかかったので読者のためにその抜萃シリーズを載せていた)の反動的性格を酷評し、同紙はその攻撃している宗教そのもの同様、卑劣で利己的で戲画的だとおのべて、ホリヨックをこきおろしている。また、一八四八年七月二十四日のパリ憲法議會で、ブルードンが神の存在をみとめる前文の仮構を抹消すべしとの動議を提出してたちまち否決されたという「デイリ・ニューズ」の報道に注意をはらっている。(ふたりのブルードンへの共感は一八九九年三月を転機として軽蔑に転ずること、後述のとおり)。さらにハリエットは、『他人の労働に干渉し財産の共同社会を建設することは社会の基本法則の直接の侵害であ

る』というヒュームの言葉がなにかの雜誌に引用されていることに注目して、いったい干渉侵害云々は「十時間法案」と「保護律停止法案」のいづれについていえるのかと問ひ、アイルランドの人民に干渉する権利があるならアイルランド地主にもつぐなわせなければならぬはずなのに軍隊と強権だけがあり、結局ただ有産者の自由への干渉だけが防禦されているといっている(Pp. 126-7)。第二の書簡(七・二七または二八附)では、「デイリ・ニューズ」が保護律停止法に賛成しているのを酷評し、イギリス憲法自慢の自由も人民がこれによって利益を享受せんとつとめる途端停止されるのかといひ、さらにそのパリ通信員がフランス議會で婦人のクラブ活動を排する「クラブ法」をフロコンが攻撃したのを挿擧しているのをいかり、ミルにぜひフランス議會批判をかけ、とすすめ、またアイルランド擾乱で惹起された反革命的傾向に『全然反対』している。——読者はここにいたつてハリエットの社会洞察力のすぐれていたことをうたがうことができなくなるであらう。

一八四八年の夏ミルは散歩中の怪我で腰をいため、治療薬のせいで眼もわるくするが、一方ハリエットはその癖としてワルトン・オン・テムズ(一八三九年頃いらい約十年間かの女の居所となつていた)にじつとしていられず、たえず南部海岸地方を転々滞在し(ミルはその間に訪ねてブルーアム卿のフランス革命批判への回答をかいた)、ついに南仏へ娘と旅行せんとし、夫の不興を買い中止せよといわれるが決行し、ミルが同行する。

本章のこの部分ではこのころのミルのハリエット宛書簡群を中心に敘述がすすめられるが、ハイエクによれば『これらは「原理」のつづく諸改訂にかんしテイラァ夫人があたえた影響について入手しうるかぎりも、ともじゅうぶんな教示をあたえるものである。』(p.131)「自伝」によると、一八四八年の革命にうごかされたミルは、「原理」第二版が「社会主義」の難点を強調しすぎて全体の調子が逆に社会主義反対の色彩を帯びたことを反省し、『大陸における第一流の社会主義思想家』の研究に従事した結果、この問題について第一版でかいたことを大部分削り、『一層すすんだ考え』をしめす論究をもって代えたといわれるが(西本訳、二七六頁)、その中心は第二巻第一章「財産」の部分であって、ハイエクはこの改訂の模様を編註で考証している。このミルの転回がハリエットの指導にもとづいていことは、ミルのハリエット宛の二通の書簡によって、はっきりしめされている(ちなみに第一版の削除された箇所の要点は、共産社会では生活が保障されると労働にも刺戟がなくなり、選択の自由もなくなるであろう、というにあった。ハリエットの批判によってこのテーゼをミルが撤回したことは重要である)。もっともミルの指摘によれば、この第一版の文句はもとハリエット自身の提議で、かの女の言葉にちかい文句でかかれたのであり、そうとすればハリエット自身の意見が前進したのである。しかしこの二つの書簡でミルは決心がつきかねて一般に第一版原文のアポロジに終始し、はじめの書簡(一八四・九・二・

一五―一九附)では、もしこの重要点を改訂しなければならぬとすれば意見変更の根拠をあらかじめ別の論文で発表しなければならず、第二版出版を延期のほかはないといひ、あとの書簡(二・一六―二一附)では、その後熟考のうえ改訂原稿を作成送附した旨を告げ、共産主義下で生活が刺戟をうしなうという難点は全然とりさることはできぬが弱めることはできるとおもふ、といっている。同時にミルはコンシデランの書物をつうじて知ったフリーエおよびフリーエ主義の平等観・婦人観をオウエン主義とともに『完全にただし』く、現段階ではその実行可能性は共産主義よりもずっとおおきく、フリーエ主義の実行可能性にたいする異論のいど以上に共産主義への異論はなからうが、しかもこの異論はなお有効である、しかしあなたがなお賛成しないなら印刷にはしない、といっている。ここにはいうまでもなくミルの社会主義観の限界がはつきりあらわれている。なお、あとの書簡によれば商品需要と労働需要の関係にかんする説明もこのとき追加された。またこの書簡は仏伊の政情を批判し、パリの婦人運動宣伝誌「ラ・ヴォア・デ・フェム」の推した一著書への反対批評を軽蔑し、ラッセルのユダヤ人排斥法案を酷評しているが、ここでも、また他の書簡でも、ミルは西南ドイツのうごきについては無関心である(本書にあらわれた資料の範囲ではミルおよびハリエットが「宣言」や「共産主義者同盟」に言及したものはひとつもない)。

その他本章に収録された往復書簡のなかには、ハリエットが

カリフォルニア金鉱発見にともなう貨幣価値変動の問題にかんしてしめした経済学の素養をもがたるかの女の一短信や、イギリス人を手放して礼讃したエマスのポストン講演をくさしたり、ドミニコ派への背教問題をおこしたJ・A・フルードを弁護したりしているミルの書簡などがあるが、『書簡(ミル、ハリエット宛、一八四九・三・二二附)は上流識者と下層民衆との接触の必要を説き、「社会主義」の障害のおおきなものはやがてなくなってしまうであろうから、もっと曖昧な難点があかるみにでてくるであろうが、それはおおきな天才と経験を要することで、現在ではみとおせないとして、ハリエットの樂觀的急進論にがえんぜず、むしろ教導による道徳感情高揚を唱えているあたりは、すでに晩年のミルをおもわせる。またべつのハリエット宛の『書簡(一八四九・三・三一附)では、かれがかって一八四六―七年の冬に「モーニング・クロニクル」によせた一連のアイランド荒地での自作農創設の提唱に反対したピールがいまやにわかに一層広汎なアイランド土地改革計画をたてるにいたり賞讃されているのに満足の意を表し、これは『ヨーロッパの情勢民衆に非なるときイギリスで一步前進を約束する唯一の出来事』だといっている。しかしミルによれば大陸社会主義の進歩はすでに確実であって、『抹殺しえない。』ところがブルードンにかんするかぎり、『ほんとに死んでしまつたらよいのとおもう』とのべて、ついさつきとは反対にブルードンの心事ややかたのあらゆる点にはげしい反感を表明し

ている点は、さすがにミルの洞察をしめす。同じ書簡でミルは、フリーエ主義が教育の起点としての人間の道徳感・義務感を忘却してひとびとを我利我利者にするだけであるとし、ファラーステールにおける計算の架空性を指摘し、その点オウエンの教育論のほうがか慎重であるとしている。この書簡はまたスターリングブルード問題にたいするキリスト教諸新聞の態度をかさねて批判している。この章のさいごに収められたハリエットのテイラー宛の書簡は、テイラーが健康の異状を訴え妻の帰省を求めたのにたいし病気のおもいミルとのえがたい会合の約束を理由に拒否を表明したもので、これから読者がハリエットのエゴイズムを感じるかそれとも率直さと知的果断さを感じるかは、自由である。

七

第七章は、みぎの旅行から帰ったハリエットが夫の病気のあついのにおどろき、全力をうちこんで看病するありさまをかけたかの女のミル宛の連絡書簡群(いずれも一八四九年)をあつめたものが中心で、内容としては看病のことに附随して「スターリング書簡集」にミルの手紙をいれることは是非や体刑反対の論議がおりこまれてくる。心からハリエットの誠意に感謝しつつ死んでいったジョン・テイラーの純真円満なひととなり、あまりにも献身的なハリエットの看護にたいするミルの異議とハリエットの率直な反論、などは、読むものところをうつつ。ジョン・テイラーの葬式にミルが出席することをすすめたハリエ

ットの書簡も、かの女の率直・積極的な性格をものがたっている。

第八章はテイラ、死後のハリエットとミルの結婚へのコースとそれにとまなう家族の不満にかんするもの。結婚までの二年間のうちの重要な書簡としてハイエックは、ミルのハリエット礼讃の典型的な一通とアメリカの婦人運動を展望した一通とを収録し、後者がのちの「ウェストミンスター・リヴュー」への寄稿論文「婦人参政権論」の出発点となっていることを指摘している。ここでも婦人論にかんするミルの創見に留意する著者は、「論集」第二巻への再録の序の微妙な含意に注意して、この論文をハリエットがかいたという通見を問題としている。かの、ミルの署名入りの（ミルは私書簡に署名しないのを原則としていた）結婚にともなう男性の法的権利の放棄宣言（一八五一・三・六附）は、すでにエリオット編「書簡集」にいれられたが、ここでも再録されている。やはりおなじく署名入りの一書簡で、ミルの几張面で神経質な性格をものがたるのがある（ハリエット宛、同七・一三附）。すなわちミルたちの結婚式は略式でメルコム・リースの登記所で挙げられたが、いよいよ署名のとき、ミルはいつものくせで「J. S. Mill」とかいたが、登記吏に注意されてフル・スペリングになおした。ところが字間の余白がなくて挿入した字が小さく線も揃わず変にみえたので、これを気にしたミルは、この書簡であらためて、教会で式のやりなおしをしよう、とハリエットに提案しているのである。この式は挙げ

られなかったらしく、ハリエットが一笑に附したとかんがえたいものとハイエックはいつている。結婚の意志をうちあけていらい、とくに結婚いらいのミルとその家族との不和につき、ハイエックはミルの妹メアリおよび病弱の弟ジョージの手紙とそれらへの夫妻の返事を収録解説している。ミルはそれまで同居してきた母およびふたりの未婚の妹（クララ、ハリエット）に反対され、さらにメアリ（コルマン夫人）にも反対されたが、しかし妹のうちでもウィルヘルミナとジェインはミルに同情賛成している。結婚の翌年におけるクララたちの妥協申出でも、ミル夫人を理解してのことではなく、母にたいするミルの回答も冷淡で非難的でみじかい。

第九章は結婚後の社会をさけたしずかな田園生活、一八五三年におけるふたり併行しての結核症の昂進、三箇月のニース行、から翌年六月の母の死にいたるあいだの、ミルの書簡および日記（五四年一月八日から試験的につけられている）からの抜萃である。五二年の「原理」第三版における夫人の役割については、幸か不幸かこのときふたりは同居していたから、資料がない（ついでながら五七・二・一九附のハリエット宛書簡「第二章収録」でミルは第四版のための改訂のことにふれ、そのばあいやはりイギリスの労働者階級の問題にかかわっている）。これもミルとしてめずらしく署名入りのハリエット宛の一書簡（五三・八・二九附）は、妻を半公式にたたえたもので、『わたくしがデューモンなら、あなたは独創のひと、ペンタム』といっ

ている。このころのミルの研究上の関心をみると、『予期どおり「自然論」を仕上げました。つきになにを企てるべきか、まったく当惑しています。―われわれのひきだしたあの秩序だたぬ順序に、われわれにみつかった問題のリストをかいてみます。

特性の相違(民族・入種・年齢・性別・気質)。愛。趣味の教育。きたるべき宗教。プラトーン。誹謗。道徳の基礎。宗教の効用。社会主義。自由。因果は意志だという教義。それにいまお手紙からの加えると、家族、因習墨守。これらをみな済ませるのはざっと二年がかりの仕事でしょう。』(ミル、ハリエット宛、五四・二・七)。さらに五四年三月以降の数箇の書簡では議會改革・行政改革「労働者階級の将来」の章の改訂、などについて言及している。ジェイムズ・ミル夫人の死については、ミルは恬然としており、ひらかれた母の遺書が遺産をジョンのものとしたときも、かれはこれを妹たちに均分するように淡々指図している。だがこの指図も妻の意見にしがたつてなされたのである。

第十、第十一章と第十二章のはじめの部分は、五四年から翌年にかけて病状のすすんだミルが、療治に美の探究をかねて第一回目にフランス、イタリア、ギリシャを、第二回目にはスイスを転地旅行したとき、長途旅行をすらゆるさなくなったハリエットにあててかいた書簡群からミルの心情を物語るものを抜萃している。日ごろの散歩ぶりからしてそうだが、このようにミルがときに血痰を吐きつつも長途旅行によつてかえって病状の好転を感じ、健脚ぶりを発揮していることは興味がある。第

一回目の旅行中の五五・二・二五附の書簡では、『帰ったら雑誌論文の選集を再刊したいとおもいます』といつて、はじめに「論集」の企画をもらしている。

第十二章のこのりの部分はハリエットの死とヘレン・テイラの生活およびミルとの関係とが主題となつてゐる。夫人の病状悪化はミルのインデア・ハウスでの劇務をゆるさず、五八年秋にやつとこの職を辞し年金を確保しえたミルは、夫妻ではじめて公然とおちついたフランス旅行にでかけるが、アヴニヨンの「ウローブ館」にいたつて遂に十一月三日、エースのかかりつけの医師やヘレンの到来もまたずに、ハリエットは不帰の客となつた。――『もう二度とわたくしが公私ともなにかやるかどうか、わかりません。わたくしの生活のばねはこわれてしまいました。だがせめてなにか有益なことをするといふくわだてをすてぬことによつて、妻の希望を最善に履行いたすであります。』(ミル、W・T・ソーントン宛、五八・一・上旬)。『妻はアヴィニヨンの墓地にうずめられています。そしてかの女とともにわたくしたちのこの世の幸福のすべでも。わたくしたちはこれからせめてできることはみな、かの女の希望を履行し、不断にかの女の墓に還つてゆくこと以外、生活になんの未練もありません。墓地のちかくに庭つきの小さな家を買いましたが、新春早々ここに参つて、時間の大部分はそこですごし、かの女とならんでうずめられる順番を待ちたいとおもいます。』(アーサー・ハーディ宛、同・一一・五附)――

かくてただちにミルは妻の遺志を奉じて「自由論」を完成し、また「論集」のはじめの二巻、「議會改革にかんする考察」以下のおおきの論文を発表するにいたる。『あきらかにミルはおのれを集中的な仕事のうちにうずめようとつとめたのである。』(p. 266)。なお著者はハリエットの墓銘をもかかっている。

さいごにハイエクはヘレンとミルの関係についてひとつの示唆をあたえている。がんばらいヘレンは女優を希望し、母を説きふせてついに五六年いらい「ミス・トレヴァー」と名乗って舞台にたつていたひとだから、あまり成功はしなかった。ハリエットはこのためだといふ気をつかっている」とはいえ、女性としての魅力はあったにちがいない。「自伝」の原稿では晩年のミルがいかにハリエットについてヘレンを賞讃するにいたつたかがのべられているが、発刊のさいペインの緊急のすすめでミルはこの部分を削除した。ハイエクはこの部分を採録することによって、本書をむすんでいる。

八

ハイエクは本書によって資料の追加以上に、なにかをしめそうとするか。かれはいう、『本書はこの特別なギャップをうすめるころみにすぎない。つまり評価をめざすころみというよりはむしろ伝記の材料である。』(p. 1)しかし本文のなかではそうであるが、『ミルの生活におけるハリエット・テイラーの重要性についてわたくしのえた結論をおそらくこ「序文」でもべてもよいであろう。それはこうだ。かれの思想や見解にあたえ

F・A・ハイエク『ジョン・ステュアート・ミルとハリエット・テイラー。その友愛と結婚』

九七

たかの女の影響力は、かの女の才能がどういうものであったにせよ、まさにミルの主張するとおりにおおきかったということ、しかしそれは一般に信ぜられているのとは若干ちがったしかたで作用したということ、これである。「この箇所、ハイエクの原文にどうしたのか文法のまちがある。―評者。かの女の影響力によって主としてつよめられたのは、ミルの思想中の感傷的部分であったどころか、まさに理性的部分なのであった。』(p. 1)。読者は本書の通説によって、ハイエクのこの結論がただししいことをしらされるだけでなく、ハリエットが社会史・思想史の動向への洞察においてまさにミルをつねに凌駕していたことにふかい感銘をおぼえるであろう。しかしさらにこのことがなにをいみするかについては、著者はかたるころがない。われわれとしては、ハリエット・テイラーといえども、その育つたイギリス上流社会の制約から本当にまぬがれることはできず、エンゲルスもしめたこのくの下層社会のおそろしい貧困の実態から隔絶されたところでは、その「社会主義」もついに頭のなかだけにおわるほかなかつたことを注意せねばなるまい。

晩年のミルの社会主義観が後退したことがかの女の死による刺戟の減衰によるのかどうかは問題をふくむとしても、そして本書もこれには答えないのであるが―『ミル夫人の思想がその死後どこまで夫の仕事を指導しつづけたかを研究することはとうてい本書の仕事ではない』(p. 266)―、それにもかかわらず、

いわば、他人の思想（はじめには父とペンタム、のちにはハリエット）の容器としてのミルを、本書はわれわれにはつきりと展示してくれるであろう。

一九五三・八・三〇

執筆者紹介

児玉洋一	香川大学経済学部教授
今川正	香川大学経済学部助手
山名伸作	香川大学経済学部助手
木村正身	香川大学経済学部助教授